

IB

アイ・ビー

2019年1月17日[木] No.2403

地域企業の繁栄をサポートする経営情報誌
企業特報 INFORMATION BANK

週2回(月・木曜日)発行 年間購読料162,000円

1996年4月10日 第三種郵便物認可 掲載記事二次転載不可

新春

トップインタビュー

新監督を迎え 今年も感動と勝ちにこだわる

アビスパ福岡(株) 代表取締役社長 **川森 敬史氏**

ラグビーワールドカップ2019™日本大会の 意義を次世代に継いでいくこと

(公財)日本ラグビーフットボール協会副会長
九州ラグビーフットボール協会会長
森 重隆氏

ラグビーワールドカップ2019™日本大会を 心血を注ぎ成功へ導く決意

ラグビーワールドカップ2019™福岡開催推進委員会 事務局長 **篠原 一洋氏**

「親子の絆」を深める理念のブランド力向上で 事業領域を拡大

(株)ジャパンスポーツコミッション 代表取締役
(一社)スポーツひのまるキッズ協会 代表理事 **永瀬 義規氏**

クローズアップ

(株)石村萬盛堂

地場屈指の老舗菓子舗本店売却・建替え
組織改革に挑む4代目経営陣

情報S.I.C

SECRET
INFORMATION
IN COMPANY

減収に歯止めかからず

(株)産業経済新聞社

■ 企業公告 ■ アラーム・ワンポイント情報

■ モルグ・カンパニー(破綻情報) ■ 裁判事件名記録 ■ マックス経営講座

「親子の絆」を深める理念の ブランド力向上で事業領域を拡大

(株)ジャパンスポーツコミッション 代表取締役
(一社)スポーツひのまるキッズ協会 代表理事 永瀬 義規 氏

国の将来を担う子どもを心身ともに健康・健全に育むのは、親の役目であると同時にそれを取り巻く地域社会の責任でもある。柔道を始めバスケットボールやソフトテニスなどのスポーツ大会を開催する(一社)スポーツひのまるキッズ協会は、スポーツを通して健康で健全な子どもの育成と親子の絆を深めている。その核になる「ひのまるキッズ六訓」は今や、企業や自治体の共感を呼んでいる。理念そのもののブランド力が高まり、事業領域を拡大する姿はこれからの時代を生きる企業の道標となるかもしれない。

(聞き手:弊社代表・児玉 直)

当たり前のことを当たり前でできる 子どもを育てる

——柔道を始めとしたユニークなスポーツ大会を開催し、注目を集めていらっしゃいますが、まずは運営する大会について教えてください。

永瀬義規代表(以下、永瀬)
2008年に「スポーツひのまるキッズ」を立ち上げ、柔道大会の運営から始めました。柔道大会は全国7地区で開催しています。九州大会も初年度から開催し、おかげさまで昨年10回目を迎えました。現在は、柔道に加えてバスケットボールやバレーボール、ソフトテニス、自転車などの大会も開催。2018年度は、年間に5種目12会場で大会を開催しました。競技大会以外にも「スポーツひのまる

キッズ“かけっこ力”測定会」やセミナーなども手がけています。

私たちは、「スポーツで子どもたちの健康で健全な心身を育成し、明るい家族関係と明るい社会をつくる」という志をもって活動しています。子どもたちの健康で健全な心身を育成するとは、当たり前のことを当たり前でできる子どもを育てるということで、そのために「ひのまるキッズ六訓」という大会理念を定めました。「『はい』という素直な心」「『ありがとう』という感謝の心」「『私がします』という奉仕の心」「『すみません』という反省の心」「『おかげさま』という謙虚な心」「『いまからここから』という不屈の心」です。

この理念の下、大会では強さや上

手さだけでなく、スポーツに向かう姿勢を含めて表彰しています。優勝することも大事ですが、私たちの大会で最も大事な賞と位置付けているのは、「マナー賞」です。柔道では各学年に1人ずつしか選ばれません。

——確かにユニークな賞ですね。

永瀬 私たちの大会は、子どもたちが褒めてもらい、認めてもらう場の創出を目指しています。子どもが褒めてもらって一番嬉しいのは、やはり親です。

たとえば、柔道の大会では対戦時に親が観覧席から会場まで降りて、子どもと指導者、親と一緒に礼をします。挨拶や礼など、親から勝ち負け以外のことで認められ、褒められることが子どもの成長につながります。

そうして、親が子どもを褒め親子の絆を深める場になるわけです。

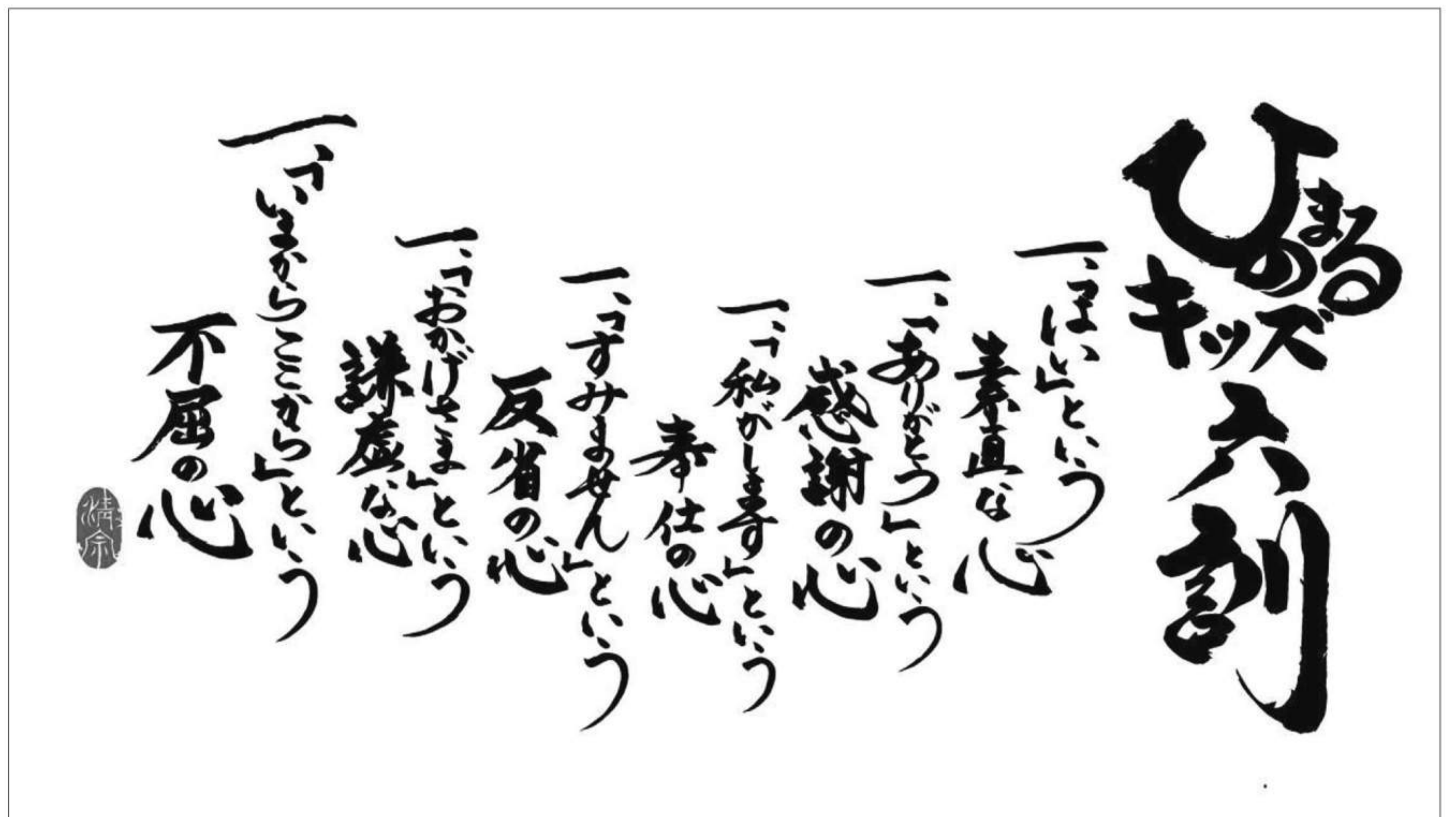
実は、子どもの成長だけでなく親の成長にもつながっているようです。子どもが表彰される際には、親も一緒に表彰台へ上がります。最初は碎けすぎた服装で表彰式に出ていた親御さんが、子どもが何度も表彰されるようになると、次第に、スーツにネクタイを締めて来られるようになったというような事例はいくつもあります。

また、会場では、あこがれの選手たちが子どもを褒める場もつくっています。大会では、試合はトーナメント戦ですので出る子どもたちの半数が一回戦で敗退します。一般的な大会であれば、この時点で負けた子どもにとっての大会は終わりとなります。私たちは、そこに子どもたちが憧れる選手を呼んで、教室を開催するなどイベントを企画します。この時もひのまるキッズ六訓に沿って行います。その時に「●●道場、永瀬義規、3年生です。お願いします」ときちんといえたら、「85点をあげてください」と選手にはお願いしています。試合では親が、イベントではあこがれの選手が、六訓ができた子どもを認めて褒めるという場をつくれます。

オリンピックでメダルを取った選手が、受け身コンテストや打ち込みコンテストを開催したり、一緒に写真を撮ってくれます。子どもにとっては、貴重な体験ですし、それがモチベーションを上げる大きなきっかけにもなっているようです。

370社の企業が理念に協賛 ——協賛する企業も着実に増えているようですね。

永瀬 私たちは、スポーツというものに対してステージを作って、そ



ひのまるキッズ六訓

れを応援してもらうという社会貢献のお金で成り立っている団体で、現在、370社からご協賛をいただいています。

社会貢献は、会社としてやらなければならないことだと思っていますから、スポーツひのまるキッズへの協賛は、福祉や環境保護活動と同列に考えています。ただ、社会貢献事業といっても、利益が伴わなければ継続できません。

スポンサーになっていただく企業の方々は、社会貢献という理念のもとに我々の活動を応援して下さるわけです。これまで、さまざまな方法でその応援を『形』に変えていくことに挑戦してきました。そして、いよいよ来年度からその具体化が見えてきました。それは、こういうことです。企業側の担当者にとっては、社会貢献活動に取り組んでいるということを発信することが必要ですが、ひのまるキッズのことを支援先として広報誌やサイトに掲載できないところもあります。遠方の会場に来ることができないスポンサーの方々は直接取材ができないため、どのような文章を書けばいいのか、どの写真を載せていいのかなどもわからないわけです。当社は、主催

者として大会の内容を報告書にまとめますから、それを加工してお渡しすれば、担当の方も手間や時間をかけずに情報を発信することができます。そうした資料をスポンサーごとに370通りつくればいいわけです。

「え、そこまで？」と思われるかもしれませんが、それこそ、我々しかできないプロの仕事と思っています。この10年でスポンサーを降りた企業は370社中、10社もありません。一口協賛などは別として、年間通してお付き合いいただいている企業さんの減少がほとんどないのは、私たちの誇りでもあります。

——それだけ、スポンサー企業からの信頼が厚いということだと思います。

永瀬 こんな風にしゃべることができるのは、10年経った今だからです。この事業を始める時は、正直もっと簡単にできると思っていましたし、資金も1億5,000万円ぐらいあればできるとソロバンをはじいていました。

以前、全日本柔道連盟や日本オリンピック委員会に在籍していた際、マスコミの間で記者会見を始めテレビやコマーシャルへの選手の出演を取り仕切る立場でさまざまな

新春トップインタビュー



親子で礼



マナー賞の表彰(バスケット)

企業トップなどとの人脈を構築していました。また、ベースボール・マガジン社に勤めていた時には、柔道大会などイベントを企画運営していたこともあり、協賛もすぐに集められると考えていました。

しかし、そういう前職のつながりに頼らずにやると決めて始めたのは良かったのですが、いざ営業に回ってみると、予想以上に協賛が集まらない。赤字続きで、借金して家も売りました。借りた金は、すべて社員の給与にあて、自分は街の友だちの店で炭酸水だけもらって、ずっと企画書を書いていました。御飯が食べられない、そんな生活を3カ月続けていたため15kgも体重が落ち、周りでは「永瀬はガンだ」という噂が立ったくらいです。

礼や返事ができる子どもが強くなる

——どのあたりから、質的に発展したのですか。

永瀬 5、6年かかったと思います。ひのまるキッズの第1回や第2回大会に6年生で出場した子どもたちが、今では20歳を過ぎました。この子たちが、オリンピックとはいきませんが、国際柔道連盟が主催する「グランドスラム」という国際大会などで入賞し始めました。そういう子

たちの多くは、うちの大会でマナー賞を取っています。きちんと礼や返事ができる子どもが、結局強くなるんだということを証明してくれたのです。

国内でも、全中、インターハイなどでも入賞するようになりました。私が言わなくても、こうした結果を見て、マナー賞を求めなければならぬと親も思うようになってくれました。それがわかってきたのが、大会を始めて5、6年目です。スタートは柔道でしたが、場を提供するという目的では卓球やバドミントンも同じです。剣道でもできる。まだまだ広げられると思います。

——ほかの競技にも汎用できるところまできたわけですね。

永瀬 昨年、愛媛の柔道大会のスポンサーから「競輪場を親子2人で自転車に乗って走るという大会をやりたい」という要望をいただきました。これは面白いと思い、スポンサーに対し「次は自転車をやります」と発表したところ、どこもノーとは言わなかった。あるスポンサー企業の社長が、うちの社員たちに対して「永瀬さんがやっているからではなく、理念があるから応援している。柔道はやったことないから、自転車でもかまわない。ひのまるキッズとは、そういうものです」と言ってくださったのです。

また、群馬県前橋市をスポーツと教育の町にしようと会社を立ち上げた人たちが、ひのまるキッズ六訓に共感してくださり、「ひのまるキッズを自分たちでやりたい。人、モノ、金は自分たちで用意するので、理念だけ使わせてほしい」という相談も受けました。

いわゆるフランチャイズの可能性もみえてきたわけです。私たちが開催する大会は少なくとも親子で500組は集まります。同じような規模の大会はきついかもしれませんが、100組程度の規模であれば十分にできると思います。

日本には1,700余りの市町村があります。これだけの数を当社が直接手掛けるのは難しいですが、各市町村が手を挙げてくれれば、各地でひのまるキッズを開催できる可能性は見えてくると思っています。

スポーツのテーマパーク

——お話をうかがっていると、大きな事業に成長する可能性を感じます。今後の展開については、どのように考えていますか。

永瀬 昨年は、ジャパンスポーツコミッション創立10周年を機に、愛媛県の(株)ハラプレックスと事業アライアンスを結び、スポーツひのまるキッズイベントの組織を拡大しま

した。

スポーツひのまるキッズ協会は、これまでの柔道に加えて3年目となるバスケット、2年目の自転車、ソフトテニスをより内容の濃いものに掘り下げ、第1回目のバレーも加え『ひのまるキッズ六訓』の理念拡大に注力。ひのまるキッズを「スポーツのテーマパーク」と位置づけ、参加者の満足、協賛企業の社会貢献活動の一助を追求しました。

——さらに飛躍できる体制を整えたということですね。

永瀬 今回のハラプレックスとの件を機に、スポンサー数で日本一のソフトバンクホークスを抜くという目標を掲げました。日本一の企業ではなく、「ひのまるキッズ六訓」が日本で一番応援してもらえる理念であることを示したいと考えています。これには、うちの社員も「永瀬だったら、1,000社ぐらいやるだろう」と納得してくれました。

また、群馬県に英語のみで教育をする幼稚園をつくる計画も進めています。そこで、「ひのまるキッズ六訓」を英語で教えます。

——理念の展開はさらに広がる余地がありそうです。

永瀬 ほかの所でもやらないかという話もいただいています。インターナショナルスクールを運営している知人がいて、彼らが一緒にやりたいと。そうすると、今度は、その人たちが市町村でやってくれるでしょう。

それから、不登校の子どもたち向けにインターナショナルスクールで体育を受け持つほしいと相談を受けています。英語や国語は在宅でも単位を取れますが、体育は学校に行かないと点数が上がらない。しかし、うちが係っているパフォーマンス分析協会は、「運動丸ごと向上プログラム」をつくり、たとえば、走って



永瀬 義規(ながせ・よしのり)

1962年10月生まれ、東京都出身。中央大学卒業後、ベースボール・マガジン社に入社。『近代柔道』編集長として「近代柔道杯」を設立。全日本柔道連盟、日本オリンピック委員会などで広報・宣伝の責任者の一人として選手の記者会見や取材、コマーシャルへの出演などを取り仕切る。2008年(株)ジャパンスポーツコミッションを創業し代表取締役役に就任。(一社)スポーツひのまるキッズ協会の代表理事も務める。

いる状態で、どちらが偏っているかを機械で正確に測定、科学的な検証を5年間にわたって行い、エビデンスを蓄積しています。それをやれば、ビフォーアフターがわかりますから、家でもできる。ほかのところでも展開してくれれば、ひのまるキッズがさらに広まることになるでしょう。「ひのまるキッズ六訓」に共感してくださる方が増え、理念がブランド力を持ち、それが年々高まってきていることを実感しています。

——かなりの可能性がありそうですね。

永瀬 これまで予想していなかったような広がりもあります。とある児童福祉施設から「親がいない子どもたちをひのまるキッズに参加させたいから協力してほしい」と依頼を受けました。ひのまるキッズは親子のイベントですから、親がいないから難しいと一旦は判断しました。しかし、「確かにその子どもたちは親がいな

い。しかし、その子どもたちもいずれ親になるだろう。その子どもたちが親になった時に、親子の絆を見せられるのはひのまるキッズしかない。見れば親子の絆がわかる。しかし、見ないとわからない。わからないまま、その子が大人になったら同じように虐待など負の連鎖がおきるかもしれない。だから、ひのまるキッズで見て、親子の絆はこういうものだということを勉強させないといけない」と言われ、現在、実現に向けて検討中です。

私たちは、「スポーツのテーマパーク」としてひのまるキッズを位置づけ、参加者の満足、協賛企業の社会貢献活動の一助を念頭に、今後もビジネスモデルに磨きをかけていきたいと考えています。

——ひのまるキッズ六訓の理念が、さまざまなかたちで広がり親子の絆が深まっていくことに期待しています。

(宇野 秀史)